自然と文化を活かし〝地球を救いたい〟少年期の夢に向かって歩む

大正大学地域構想研究所 准教授 岩浅有記（いわさゆうき）さん

その少年は、徳島出身の母親が東京から里帰り出産をしたため、阿南市で生まれたが、5歳7ヶ月まで東京で暮らし、父親の転勤で岡山へ。小学校時代を岡山で過ごした。

ただ、両親が共働きだったため、幼い頃から盆暮れの長期休みには阿南市福井町鉦打の祖父母の家に預けられて育った。

「毎日、里山で遊んでいました。季節で風景の色が変わる自然が大好きでしたね。祖母に連れて行ってもらう春には彼岸花が咲いて、秋は柿の木に実がなって。冬は野いちごです。取って食べてました（笑）。でも、〝ここは誰かが育てている木だから取ってはダメ〟〝ここは共有地だから取ってもいい〟ということは教えられていたので、その区別はちゃんと守っていました」

愛読書の植物図鑑を眺めては里山で草花や木々を観察する。そんな日々が楽しくて仕方がなかったようだ。

当時も今も道は未舗装だが、集落の人たちが協力して道を整備し、自分たちで管理した。その一方、人の手が入らなくなると棚田の景色が荒れていくのも目の当たりにした。

小学校卒業後、父親が母の実家の家業を継承することになり、徳島に転居。

「中学時代は時間があるとサイクリングに出掛けてました。那賀町沢谷の大釜の滝、海陽町の轟の滝、木頭にも行ったし、四国最東端の蒲生田岬にも行きました。一人で行くこともあったけど、学校にサイクリングの好きな友達もできて、一緒に行ってました」

時には早朝まだ薄暗いうちに出かけて、真っ暗になってから帰宅することも。

「景色の見え方が変わることが好きでした」

富岡東高校一年の夏休みに、一人旅で北海道に行った。

「物心ついた頃から鉄道が好きで、その頃は時刻表と地図が愛読書だったんです（笑）。時間があれば広げて眺めて、頭の中で旅をしていました。今でも覚えてますよ。徳島から岡山経由で大阪に行き、大阪発10時10分の特急で22時47分に乗り換え駅の青森へ。そして札幌着が朝の6時。日本海沿いの風景の移り変わりと、新潟・山形・秋田の広大な田んぼが

印象に残っています」

初めての一人旅は6歳のとき。母親が彼を実家に預けるため、岡山から宇高連絡船で高松まで送って行き、高徳線に彼を乗せ、徳島駅まで一人だった。もちろん徳島駅では祖母が待っていたのだが。

「生まれて初めての鉄道での一人旅が楽しくて仕方なかった。冒険が好きなんです（笑）」

高校になると小説が好きで椎名誠はよく読んだ。中学時代の時刻表や地図。小学生の時の図鑑。そこから浮かび上がるのは自然を愛する冒険少年の姿。

「いまだに無人島に探検に行きたいという夢は持ち続けています」

そんな彼が自然保護、環境問題に関わり始めたのは筑波大学時代。

「中2のときに、将来何になりたいかと聞かれて〝地球を救いたい〟と言ってました（笑）。ちょうど92年に地球サミットが開催されたときでしたし」

地球サミットとは、92年にブラジル・リオデジャネイロで開催された国連主催の会議。正式には『環境と開発に関する国際連合会議』。国連環境開発会議とも呼ばれ、持続可能な開発、発展途上国の開発と環境保護との調和が理念。人類と自然の相互依存を強調し、持続可能な開発のために環境保護が不可欠であることを宣言、また森林の経営、保全、持続的開発への貢献などを声明とした。

そして彼は「保護するには自然の法則を知らないと始まらない」と思うようになり、筑波大学では農林学系を選んだ。

「森林の空間や構造が時間とともにどう移り変わっていくのか、人の手がどう必要なのかとか。森林の中には、常緑樹であるスダジイのように種が落ちて自然に後継樹が生えてくるものもあれば、落葉樹の明るい森じゃないと生きられないものもある。様々な植生を元々里山林であった広大な大学キャンパス内で学びました」

その後、東京大学大学院の農学生命研究科に森林だけではなく、様々な生態系を総合的に学べる生圏システム学専攻が新設され、2期生として入学。

「大学院では木の年輪を調べていました。年輪を数えることで林齢がわかりますから。50年前に放棄された木が30年前にどうなって、20年前、10年前はどうだったかが推測できます。それを繋いでいくと歴史が見えてくるんです。ただ、そのために木を輪切りにした円盤を磨いて磨いてで、磨いて1日誰とも話さずに終わることもよくあり、あ、これは研究者は無理だなと思いました（笑）」

時間と空間を学び、木を見て森を見ずにはならないよう、森林は中長期で見る。中長期とは４００年という悠久の時間。10年、20年で見るものとは桁が違う。どこかロマンが感じられるが、現実では痛い思いもしたようだ。

「南伊豆にある東大の演習林でマムシに噛まれたことがあります。最初は痛いだけだったのですが、そのうち指が痺れて腕が太ももくらいにパンパンに腫れて。このまま心臓まで腫れが上がってきたら心臓が止まってしまうんじゃないかと本当に恐怖でした。でも肩で腫れが止まって何とか持ち堪えました。あの痛みは、硫酸をかけられたようなとてつもない痛みです。あ、でも硫酸がかかったこ

とは一度もないですけどね（笑）。1週間くらい入院してましたよ」

退院して家に戻り、テレビをつけたらNYの9・11が報じられていた。

自然保護を行う上で大事なことがある。

「それで食べていけなければ持続可能な自然保護は難しいです。とはいえ、大学で自然保護を学んだからと言って、自然保護の仕事はなかったし、今でも限られています。なので自然保護を直接仕事にできる環境省に入りました」

当時、植物にしか興味はなかったが、佐渡に転勤し、トキの試験放鳥に取り組んだことで、トキを保護するだけでいいのかと疑念を持つように。「現状を守るだけでは自然が社会に果たす役割がわからない」

トキを保護するためには、トキのエサとなる生きものが増えることが重要になる。トキはエサの昆虫や蛙、ドジョウを山間部の田圃や湿地、川辺で探す。トキが安全なエサを食べるためのエサ場を機能させるには自然環境の再生が不可欠となる。

「ただ自然保護を高らかに叫んでも広がりません。生きものを育む農法をやってみませんか、自然を活かす地域づくりをやりませんか、経済効果もありますよとなると、広がるんです」

自然には防災、減災にも資する多様な機能がある。木々を育てた防風林や豪雨時に水を貯める遊水地を整備するというグリーンインフラという考え方を閣議決定された国土形成計画に盛り込んだのは岩浅氏だった。

その頃、欧米では自然を守るために高付加価値で持続可能な新しい観光を目指すという〝アドベンチャーツーリズム〟が広がりを見せていた。

「自然の価値を発信すれば自ずと再生、活用に繋がります。観光資源となれば利益を上げる仕組みも作ることができる。でも、縦割り社会の省庁ではそれを実現させることは難しかった」

役人は赴任地での任期を終えるとプロジェクトの途中であっても次の場所に移る。それを「無責任」と思ってもどうすることもできなかった。役人はかつて関わったところに戻ることはできない仕組みになっている。年月が経てば立場も変わる。

「では立場を変えれば関わり続けられるんじゃないか」とコロナ禍の真っ最中、沖縄で役人生活を18年で辞めた。

現在、大学で教鞭をとりながら、役人時代の現場である佐渡、奄美・沖縄でアドベンチャーツーリズムに関するアドバイスをしたり、鳴門市のコウノトリのプロジェクトに関わったり、阿南市では自然を守り、活かすアドバイザーも務める。名刺には10もの肩書きが印刷されている。

「自然と文化を活かしてその土地を元気にしたいですね。個人的には冒険の旅に出たいです。7つの有人島と5つの無人島からなるトカラ列島を回りたい」

屋久島と奄美大島に挟まれて並ぶトカラ。

「思わぬ出会いがありそうで、想像しただけでワクワクしますね」

その表情は、おそらく幼少期に里山を歩き回ったときと同じなのではないだろうか。

（取材・文／北島由記子　写真／永井守）